



D O N C どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418
418, Komei-cho Tsu-shi
TEL 059-226-2766
FAX 059-229-0967

N° 71 février 2005 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

3/27

洋学の系譜

日本人はどのようにフランスを知ったのか？

柏木隆雄先生のフランス文化講演会

恒例となった大阪大学教授・柏木隆雄先生(松阪市出身)の講演会、これまでは「文芸講演会」として、主にフランスの大作家とその作品を中心にお話ししてきましたが、7回目となる今回は視点を変え江戸時代から明治にかけて日本でフランスがどのように知られてきたか、日本における「フランス学事始め」といったテーマでご講演いただくことになりました。いま私たちがかかわっている日仏交流のルーツを知る上でもたいへん有意義な内容ですので、ぜひご来聴ください。一般公開としますのでお誘いあわせてどうぞ。

■日時 3月27日(日曜日)午後2時

■場所 アスト津3F ミーティングルーム3・4 津市羽所町(津駅前)

入場無料

鎖国日本が200年も続いたとは信じられないほど、欧米の文化は日本の日常に入り込んでいます。しかし鎖国時代、どのようにしてヨーロッパのことを学ぶことができたのでしょうか。フランス語の辞書は最初に誰が作ったのでしょうか。当時のことを調べてみると、今の豊かな文化がいろいろな人の苦闘のおかげでできあがったことが分かります。今回はそういうフランス学事始めを考えてみたいと思います。

柏木隆雄

講演会終了後、先生を囲んでの懇親会を予定しておりますのでご参加ください。申し込みは事務局長の滝沢さんまで。

現代日本のスポーツ放送に おけるナショナリズム

チエリー・グットマン
Thierry GUTHMANN

外国人にとって日本でスポーツの国際大会をテレビで観ることは苦痛である。なぜなら、90%以上の報道の時間は日本人の活躍振りを見せるために使われているからだ。国際大会を報道しているスポーツ番組の中心テーマはスポーツではなく、日本人、つまり日本という国だ。日本のチーム・選手に勝つチャンスがある種目が報道される。日本のチーム・選手が負けたら、それ以降その種目の報道はほとんど完全に消える。アテネオリンピックの女子バレーチームはその典型的な例だ。本来日本の伝統スポーツである柔道の場合でさえ、柔道自体を楽しむと言う感覚は低いらしい。つまり日本の選手が負けた階級で、最終的に誰がどのように優勝したかについて関心は低い。生放送で、かつNHKであれば、日本人がいない場合でも決勝戦を見せてくれる時もあったが、スポーツニュースにおいては、当然のここのように階級の優勝者の名前さえ言わなかった。また、連日「メジャーリーグ情報」と言っても実は「メジャーリーグで活躍している日本人情報」をやっている。同じチームのアメリカ人選手のプレイを全く見せない。かろうじて試合の結果を言うぐらいだ。大半の日本人はメジャーリーグに興味はあまりなく、そこにいる日本人が良いプレイを見せているか否かに関心があるに過ぎない。日本人選手が良いプレイをすると自分が日本人であることを誇りに思うことができ、ナショナリストな気持ちがくすぐられているのではないかと思う。

こういう話をする、どんな国でも似たようなものではないかという人がいる。確かに多少似たような現象が見られる。しかし、日本のテレビ局ほどナショナリストな報道の仕方をしている海外のテレビ局は少ない。もちろん北朝鮮のような独裁国家では同じような片寄った報道をしているかもしれないが（笑い）。オリンピックの会期中フランスへ帰省した。報道におけるナショナリズムの程度は明かに違っていた。具体的に言えばフランステレビ局の報道の場合はスポーツ自体が中心的な位置を占めていた。もちろん、かなりフランス轟然な時間・報道もあったが、主なスポーツが全て報道された。面白い、質の高いプレイや演技があったらフランス人であれ、外国人であれ関係なく完全に報道されたことが多い。例えば、フランスのチームが出場していなかったにも関わらず日本が優勝した体操男子団体戦決勝は全ての演技が完全に報道された。また、サッカーはフランスにおいて一番人気があるスポーツ。そして、海外のサッカーメジャーリーグで活躍している選手が多い。例えば、スペインのレアル・マドリードでプレイするジダン。しかし、日本みたいに、連日、当然のように彼らの活躍振りがテレビで報道されることは決してない。

(三重大学人文学部助教授／フランス・アルザス地方出身)

日本の「冬ソナ」ブーム、 パリでも話題に

伊藤隆之さんからの資料〈ル・モンド〉のテレビ・ラジオ誌

パリ在住のピアニストで、昨秋津市と菰野町でのコンサートに出演し好評だった伊藤隆之さんが「こんな記事がありましたよ」と、8月発行〈Le Monde, RADIO-TELEVISION〉誌を届けてくださいましたので披露します。

それは「韓国に魅せられた日本」という特集で、表紙に雪の降る木立の下で寄り添うペ・ヨンジュンとチェ・ジウの有名なシーン、さらに2ページにわたって日本の韓流ブームに関する記事や写真が掲載されています。ざっと目を通しますと、最初に〈韓国のテレビ番組「冬のソナタ」の日本での成功は、日本人の韓国文化への傾倒と2国民の接近を表している〉と前置きし、盛んな日本人の「冬ソナ・ツアー」のもようを紹介、かつての植民地支配などから近隣憎悪が続いていたのを解決する救いの神(デウス・エクス・マキナ)にヨン様になったと書いた日本の雑誌も引用しています。また、「冬ソナ」成功の原因として、20年余りに日本やアジアで現象的な大成功をおさめたあの教訓的な「おしん」を引き合いに出し、作品の調子は違うが、同じようなまじめさと強い感傷は共通していると分析しています。

ペ・ヨンジュン Bae Yong-joon については、「細いめがね、少し額にたれた髪、まじめで優しい様子、そして控えめな笑顔で日本を魅了した。日本の女性はいつも多くのマンガの主人公のような、繊細でやや女性的な美青年にひかれるようだ」と書いています。あなたは？
(井土 記)



予告 南仏からサンチャゴへ 世界遺産巡礼の旅 (9月)

熊野古道の世界遺産登録を記念して

昨年、熊野古道がユネスコの世界遺産に登録されたのを記念して、このほどNPO法人「紀北くまの道」理事長川端守さん(尾鷲市)らが、古道としてはもうひとつの世界遺産である南仏からサンチャゴ・デ・コンポステーラ(スペイン西北端の大聖堂でキリスト教3大巡礼地のひとつ。フランス語では Saint-Jacques de Compostelle)への巡礼道をたどる旅を企画し、三重日仏協会にも協力の呼びかけがありました。興味深い企画ですので本会としてもできるだけ参加したいと考えています。詳細は未定ですが、9月上旬、ボルドーからピレネーを越えてスペインに入る計画で、健脚を誇る方は3日かけて徒歩で峠越え(一般は交通機関でも)。5月発行の〈done〉次号でさらに詳しい旅程、費用などお知らせする予定。

お問い合わせは 井土 (059-226-2766) まで。

1
20

パリからのお客・ヴォルヨン夫妻歓迎会

運営委員の大原里歩さんの親戚でパリ在住の小菅ヴォルヨン暁子さんが新年、フランス人の夫ルークさんとともに亀山市にお里帰りしたのを機会に、日仏協会のメンバー有志で歓迎しようと1月20日夜津市のレストラン〈サンマルコ〉でささやかな食事会を開きました。暁子さんはパリ17区で不動産業「京」MIYAKOを経営しており、日本人に長期、短期のアパルトマンなどを紹介するケースも多いそうです。ルークさん（アルザス地方出身）とは留学先のロンドンで知り合ったとか。

参加者一同苦勞してフランス語で自己紹介したあと、お菓子やワインのことや、フランス人の日本に対する関心など楽しい話題はつきませんでした。（写真はヴォルヨンさん夫妻）



山画廊（四日市）主催 パリでの展覧会が盛況

四日市市にある山画廊は、1月24日から28日までパリ6区にあるギャリリ・アリザリーヌで「日本の華麗なる手仕事の世界」展を開催、万古焼の森一蔵氏や輪島塗の箱瀬淳一氏ほか異なったジャンルの著名芸術家7人の作品を展示しました。会場には日本大使館から山田公使をはじめ在仏の日本人や、多くのフランス人が次々と訪れ、日本伝統工芸の粋にため息をもらす光景も。「もっと日本の工芸のことを深く知りたい、5日間では短すぎる」などの声も聞かれました。また、これを記念して同時におこなわれた「パリと南フランス美術館めぐりの旅」には本会理事の豊田元子さんら三重県各地から約20人が参加しました。



3
5

近藤綾子ピアノリサイタル〈ジャズ・イン・クラシック〉

3月5日（土曜日）午後2時
ザ・コンサートホール
（名古屋伏見・電気文化会館）
ガーシュイン：
ラプソディー・イン・ブルー
ラヴェル：道化師の朝の歌 ほか

近藤さんは四日市市出身、名古屋を中心に国内外で幅広い演奏活動をおこなっています。現在鈴鹿国際大学短期大学部特認講師、三重日仏協会会員。

入場券は当日3,000円ですが下記・ご本人に連絡すれば前売り2,000円でわけていただけるそうです。

e-mail: Ayakoline@pop21.odn.ne.jp

さらに詳しいことは近藤さんのホームページ

<http://www.1.odn.ne.jp/~cas63670/>

若者の夏のフランス研修生募集

Stages d'été 2005

仏大使館より

駐日フランス大使館文化部では今年度7、8月フランス各地でおこなわれる日本の若者対象の研修（語学、観光、文化）への参加者を募集しています。研修は、

1. 「フランスを知る」、11の地域に分かれて13人。
2. アヴィニョンのフェスティバル参加、2人。
3. パリでの現代芸術発見、4人。

以上の三つの分野があり、10日前後の日程です。参加資格は18歳から25歳まで、健康でフランス語がわかること、往復の交通費は各自負担となっています。

締め切り3月10日。問い合わせ、申し込み書は井土まで。